

魔法の宿題 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名： 日置晋平 所属： 大阪府立東大阪支援学校 記録日：2016年2月25日

キーワード： 重度重複障害 コミュニケーション 表出の少なさへの支援

【対象児の情報】

学年	小学部2年 女子
障害名	◎重度重複障がい
障害と困難の内容	自分の伝えたいことが、うまく伝えられない。
定位反応	○ 周りの様子をしっかり見ており、家で担任や友だちのモノマネをする。
探索反応	○ 気になるものや人を探索したり、追視したりすることができる。
快・不快	◎ 快に対する反応は控えめだが、不快に関しては強く拒否をする。
要求・拒否	○ 要求したいことがあっても、自分からは中々要求できない。
注意喚起	◎ あそびに夢中になっていると自分から「見て」と要求することがある。
有意語	○ 1～2語文くらいで話すことができる。

◎ 再現性有り、客観的な説明が可能 ○ 主観的には OK、実態の共有可能 △ 芽生え、不安定 — できない？ わからない

【活動目的】

当初のねらい（計画書の学習目標）と活動による方向性の確認状況

【活動の様子や印象に残ったことを、写真を交えて伝える力を身につける。】

写真などをタブレットで示しながら伝えることで、本人の持つ言葉だけでは伝えきれない気持ちや内容を、より具体的に伝えられるように支援していく。



*上記の目標に取り組む中で、コミュニケーションの幅を広げ、より楽しさを感じてほしい。

- ・実施期間 2015年6月～現在も継続中
- ・実施者 日置晋平
- ・実施者と対象児の関係 担任と学級の児童。

【活動内容と対象児の変化】

対象児の事前の状況

対象児は入学時には自ら発言をすることがほとんどなく、こちらからの話しかけにもリアクションは少なかった。しかし1対1の関わりになると色々とお話をするようになってきた。言葉も1～2語文程度は入学時には獲得していた。

2年生になり、昨年よりは発言は増えているものの、この子の伝えたいことは本当に伝えられているのか、という疑問が芽生えてきた。写真を介することで伝えたいことを補完して伝えられることで、発言は増えてくるのでは、という考えから本研究に取り組むこととした。本人の持つ語彙はまだまだ少なく、また言葉にしたい内容を想起するのも時間もかかっている様子が見られていた。

試しに自立活動（個別課題）の取り組みの様子を撮影し、それを一緒に見ながら、何をしているのかを質問してみると、本人が言葉でうまく言えないことを指差して示すことがあった。また写真の中の具体物を指差して「これは何？」などと質問すると、答えることができた。

以上のことから、写真をコミュニケーションの中で、自分の言葉の補助として使うということが有効なのではないかと考えた。支援者から話題をイメージできる写真を提示することで、「その場面で何があったか、自分がどのような活動をしたか」を伝える力を身につけられるように支援していきたい。

活動の具体的内容「活動の様子や印象に残ったことを、写真を交えて伝える力を身につける」について

対象児が個別の課題を取り組む様子を撮影してみることにした。家庭からの情報では、対象児は入学以来、学校が楽しく感じており、家でも学校での活動を弟と再現して遊ぶことが多いとのことである。「印象に残った」ことをどの場面を特定するかについては、基本的に学校での活動を楽しんでいることから、この対象児が中心になっている場面や個別学習の時間などでの場面を選んでいくこととした。「印象に残る」に関して、この対象児にとっては「楽しい」が現在では一番近い感覚で感じているのでは無いかと考えている。タブレットやiPhoneを持ち帰った際には、下校バスを降りたらすぐに機器を持ち帰ったことを伝えていることから、場面を変えても伝えたいことがある意欲は育ってきていると感じられる。

学習の終わりに撮影した写真や動画を一緒に見ながら「これは何をやっていたの？」などの質問をすると、「クリップでつけてる（はさんでいる）」「えんぴつで書いている。」などを答えた。

② ①の活動を約2週間の間に3回程度行ったところで、タブレットを家庭に持って帰ってもらった。対象児は持って帰る際は特にリアクションは無かったが、下校バスを降りて母に迎えてもらった直後に「タブレット持って帰ってきた！」と勢い良く母に伝えたとのことである。帰宅後、母とタブレットを見ながら母が質問すると、いつもより言葉も多く、写真などを見せながら詳しく伝えたとのことである。下校後に学校の話をする際には、一緒に遊んだ友だちの名前を挙げて話をしていくとのことであった。（連絡帳より）

保護者と連携して、家庭での様子を撮影してもらい、それを学校で伝えてもらう取り組みをした。「ラーメン食べた。」「・・・くん（弟）と**した」「これはパパの。」などを伝えてくれた。途中、自分が写っている写真の後ろで姉がスマホをいじっているのが写っているのに気づき、「ねーね（姉）、ケータイしてる。」などの様子を話すこともあった。

対象児の事後の変化

9月に入ってから、写真を使わずに話すのと、使って話すのとを2つのパターンを試してみた。

① 写真を使わずに話してみた場合。

質問内容は昨日（9月12日）の様子。次の日の連絡帳に書かれていた内容を質問した。「授業参観後に対象児と母、そこに父が合流してファミレスで食事をした。その際に対象児はスイーツを食べ、父が食べていたトンカツも少し分けて食べた。母が帰宅後に連絡帳を読むと給食を完食した後だったので驚いた。」と書かれていた（対象児は普段は少食。）

質問	回答
「昨日、どこか行った？」	「公園」（この日は行っていない）
「昨日、どこかのお店に行った？」	回答なし
「誰と行った？」	「パパと、ママと、（自分の名前）と、パパ。」
「何か食べた？」	「アイス」
「トンカツもらった？」	「うん」

言葉だけのやりとりならば、こちらからの質問に答えることが中心になった。自ら発言することもなく、話題が広がることもむずかしかった。

② 写真を使って話してみた場合。

質問内容は1学期の学部行事「七夕のつどい」～夏休み中の様子

質問	回答
学部行事、『七夕のつどい』で使用した笹飾りの写真を見ながら。 「これは何？」	「おまつり」 その行事の司会の教員は和服を着ていたり、学部全員が集まっていたりすることから、そう表現したのかもしれない。
弟と一緒にいる写真を見て。	「（弟）くん、おった。」（自ら発言した）
プラレールをしている写真を見て。	「私の」「電車」「3つ」（自ら発言した）
サマーフェスティバル（PTA 行事）の写真。	「ママと（来た）」「パパ、弟、来ていない」 *写ってないだけで来ていた。
ディズニー・オン・アイスを観に行った写真。	「ママと弟と姉と私とミッキー（行った）」 *パパも行っていたが写真には写ってなかった。

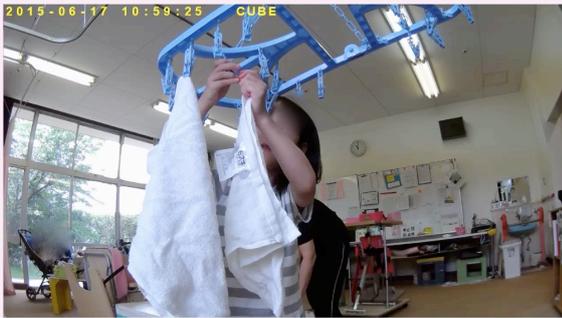
* 父親が主に撮影してくれていたため、ほとんど父親は写真に写っていない。

しばらく期間が開いても、写真があると色々な質問に答えることができた。他にも自分から気づいたことを発言することもあった。特にプラレールをしている写真に関しては、自分のものであること、自分の電車は3つということなど、より細かな情報を自ら伝えることができた。

以上のことから写真は対象児が伝えたい内容を補完していると考えられる。

- ① 研究を始めてから2月当初まで、本人の体調、家族の都合などで、欠席が多く、充分に取り組みていないが、取り組みの中で言葉を出してのコミュニケーションはわずかに増えてきている。
- ② 対象児と弟の関係の中で、家庭に機器を持ち帰っても取り組みが難しい。
- ③ 登校した日に機器を家に忘れることが続いた時期があった。

以上のことから、家庭に持ち帰っての取り組みを続けていく回数を減らすなどして、家庭の負担を減らしていくことを考えている。その代わりに学校での活用を増やしていく。



個別課題の時間を撮影したものの。この取り組みは対象児も好きで自信を持って取り組んでいる。これは動画で撮影したもので、家庭で母に「ハンカチをつけてる」と、一緒に観ながら説明できた。



家庭での様子。どれが自分のプラレールかを写真を観ながら説明することができた。

③ 写真がある場合と無い場合の比較 (実際に対象児に提示した写真)

休憩時間に遊んでいる様子



写真が無い場合

休憩時間は何をしていたの？

・・・

無言になってしまう。どう説明したらいいかわからない様子。

音楽の授業の様子①



写真が無い場合

音楽は何をしていたの？

コロコロした

簡単にしか答えない

音楽の授業の様子②



写真が無い場合

誰の背中をさわったの？

・・・

無言になってしまう。(友だちの名前は知っている。)

写真がある場合

赤ちゃんねんね。

と遊びの様子を伝えようとした。

写真がある場合

何を転がしたか知らなかった(どんぐりがわからなかった)。写真を見せると「これ」と言うことができた。

写真がある場合

〇〇くん!!

自信を持って答えることができた。

歌に合わせて前に座る友だちの背中を撫でる取り組みで、誰の背中をさわったのか尋ねてみた。実際にさわったのは同じクラスで修学前からの友だちである。

研究を始める前の、写真を使わずに会話をするのと、写真を使って会話をするのとを比べてみた場合、明らかに写真がある方が言葉は多かった。写真があることで、対象児は話題をより明確にイメージすることができると思われる。

しかし、語彙を増やす、会話の幅を広げるには、この研究での取り組みだけではなく、語彙を増やすための学習も並行して行うことも必要であり、その学習と当研究での取り組みを重ねていく中で、対象児のコミュニケーション力を高めていけるように支援していく必要が感じられた。

【今後の見通し】

- ① 当研究を終えても、今後も学校での活動をタブレットなどで撮影し、振り返りをする中で、言葉で伝える力を伸ばしていく。
- ② 写真を使ったコミュニケーションを継続していく中で、発語への意欲を高め、言葉でのやり取りの楽しさを感じられるような支援を行っていく。
言葉でのやり取りを重ねることや、個別の取り組みの中で、語彙を増やせるように支援していきたい。

【その他エピソード】

対象児は帰宅後に長い昼寝をしてしまうなどのことから、夜の就寝時間が遅くなることもある。そのことから今年度は生活リズムが乱れてしまい、登校できなかったことが多かった。しかし登校してくると、寝不足でもあくびをしたり、眠そうにしたりすることはほとんどない。学校で眠ってしまったことも入学以来、一度も無い。しかし、この研究の中で、写真を見せずに質問をすると、あくびをしたり眠そう伸びをしたりする様子が多く見られた。これは思い出すという行動が、対象児にとって強い負担なのか、座ってじっくり考える取り組みが負担なのか、それとも他に原因があるのか検証する方法が見つからなかった。

2月下旬より2週間の訓練入院することになった。その訓練の中には言語療法も含まれており、その訓練の内容を言語療法士と連携することで、対象児のコミュニケーション能力を伸ばす支援に役立てていきたい。